

## 論文審査の結果の要旨

氏名：吉 村 さやか

博士の専攻分野の名称：博士（社会学）

論文題名：髪のない女性たちの「生きづらさ」に関する社会学的考察  
—フィールドワークの経験を通して—

審査委員：（主査） 教授 好井裕明 ㊦

（副査） 教授 中村英代 ㊦ 教授 石岡丈昇 ㊦

早稲田大学教授 草柳千早 ㊦

本論文は、先天的・後天的な疾患（脱毛症、抜毛症など）によって髪を喪失し、まだら頭やスキンヘッドとなった女性、即ち髪のない女性たちの日常生活世界における「生きづらさ」を詳細に検討した社会学的研究である。具体的には、当事者とその家族の生活史聞き取り、当事者の会の参与観察、当事者の会の運動史に関する資料収集と内容分析、個別に「生きづらさ」に対処し生活を営んでいる個人への詳細な生活史聞き取りなど社会学的フィールドワークや質的分析手法を駆使し、髪のない女性たちの「生きられた経験」を明らかにしている。

本論文の背景には、女性にとって髪はジェンダー・アイデンティティのシンボルと捉えられ、女性が髪を喪失するという経験はタブー視されてきたことがある。日本においても同様に、男性の髪の喪失、即ち「禿げること」をめぐる社会学的研究蓄積はあるが、髪のない女性の「生きられた経験」に迫ろうとする社会学的調査研究は皆無であった。その意味でまず、本論文は貴重な経験的研究であり、きわめて独創性が高い先駆的研究だと評価できる。

本論文は、髪のない女性たちの経験をめぐる海外の社会学研究を批判的に検討した序章から始まり、当事者の経験の多様性を考えながら、「生きづらさ」とは何かを検討した第1章、それを踏まえて「生きづらさ」を乗り越えたと語る女性たちの詳細なライフストーリーから発症以降現在に至るまでのプロセスを丁寧に検討することを通して、「生きづらさ」を軽減／解消しうる対処戦略を明らかにした第2章から第5章、本論文で「ウィッグ生活」「スキンヘッド生活」とよんだ2つの対処戦略を障害の社会的構築を批判的に検討する現代社会学の最新アプローチである「障害社会学」の視座から比較検討し、その実践的な意義を論じた終章から構成されている。

以下、本論文が得た独創的な知見をまとめておく。まずは詳細な生活史聞き取りを通して、当事者にとっての「生きづらさ」とは何かを明らかにしている点である。それは女性としてのアイデンティティの身体記号としての髪がないことによる辛さや悲しみではなく、髪がないことをどのように普段露見しないようにするのかという対処過程、すなわちパッシングによって生じる問題経験だという指摘である。さらに「生きづらさ」は彼女たちの日常生活に支障をきたすだけでなく、人生選択やライフコースにも影響を及ぼしていたことが明らかとなった。これは「生きづらさ」を個人の主観的心情の次元に限定するのではなく、「生きづらさ」が日常生活の相互行為次元で常につくられ続け、その問題経験の対処や解決もまた相互行為の次元で達成され得ることを示す優れて社会学的な成果と言える。

また本研究の特筆すべき点は、当事者へのインタビューだけでなく、当事者コミュニティでのフィールドワークや当事者の家族へのインタビューが実施されている点である。当事者コミュニティでの当事者たちの活動や家族との相互作用が丁寧に描かれることで、本研究は、「髪のない女性たち」の生活世界を複数の視点から立体的にとらえることに成功している。

次に、「いまはもう生きづらさを感じない」「乗り越えた」と語る女性たちに注目し、それ

ぞれの生活をめぐる語りをもとに、発症以降現在に至るまでのプロセスを丁寧に検討し「生きづらさ」を軽減／解消しうる対処戦略を明らかにしている点である。それは「ウィッグ生活」と「スキンヘッド生活」という対照的なものである。前者は、髪復活をめざす治療を放棄することを契機として、髪のないことは「治さなくてもいいもの」だと新たに意味づけたうえで、ウィッグを自らの暮らし方に適合させるように活用し、日常的な露見の危うさを乗り越えて、「生きづらさ」を軽減、解消しようとする戦略である。それは女性にとって髪は重要であり、身だしなみやおしゃれに配慮することは好ましいという支配的文化と親和的であることも明示されている。後者は、髪のない自分の姿を「さらす」という戦略であるが、そこには「わたし」個人の「生きづらさ」を「わたしたち」の問題経験として共有したうえで、同じ問題経験に対処する「わたしたち」がどのように社会や文化の支配的価値に向き合えるのかといった当事者運動的な意味が込められている。具体的には啓発場面ではウィッグを外したり、場面状況に応じて「さらす—隠す」を使い分ける戦略から家庭生活を含め日常全般で「さらし続ける」戦略もある。「スキンヘッド生活」という対処戦略は「生きづらさ」から解放されるだけでなく、露見によって生じる問題経験を最小化させ、家庭生活を維持しながら、家族とともに生きることで、当事者の「生きづらさ」を軽減／解消し得ていた。この二つは、当事者が問題経験に向き合い、生きていくうえで創造した「生きられた社会学的実践」と言え、重要な知見だと評価できる。

さらに言えば、特定の価値に依拠して、特定の対処戦略を「評価」するような記述を採用せず、対処戦略の多様性を丁寧に描出した点が評価できる。通常、社会学的議論だと「先鋭」的なものが評価されがちであるが、本論文ではウィッグ生活も丁寧に戦略の内実を取り上げて、多様な戦略を並列的に記述している。こうした議論は、採用する戦略は異なっても、問題経験としては共通の磁場を生きている当事者たちの姿を明示することに成功している。ウィッグ生活とスキンヘッド生活を対立させるのではなく、両者を今一度つなぎ、対話可能にする議論である。本論文は、表面的な「先鋭」さに囚われずに、より根底的な議論を展開されており、評価できる重要な点と言える。

こうした知見は、髪のない女性が経験する曖昧で名状しがたい抑圧や否定的情緒など、まさに「曖昧な生きづらさ」をリアルに分析し見事に整理されたものであり、社会問題の社会学において、これまでなかった独創的な成果だと高く評価できる。

一方、残された課題もある。第一点は髪のない女性の「生きづらさ」という問題経験をどのように他の「生きづらさ」や差別問題と関連させ位置づけていけるのかという課題である。既に障害をめぐる社会学では、軽度障害をめぐる研究蓄積もあり、こうした成果を涉猟したうえで、髪のない女性の「生きづらさ」がどのような意味で「障害」であるのか、あるいはそうでないのかを考えていく必要がある。本研究の調査対象は「髪のない女性たち」だが、それはジェンダーをめぐる問い、障害と差別をめぐる問い、当事者間の多様性をめぐる問いなど、多様な問いが交差するフィールドとなっており、「髪のない女性たち」の語りを超え、現代を生きる人々の生きづらさと生きづらさへの対処についての語りとしての普遍性を有している。この普遍性とどう繋げていけるのかは、さらに展開すべき重要な課題といえよう。

第二点は、学位申請者本人もさらなる課題として述べているが、「生きづらさ」に対する個別の対処戦略だけでなく、どのようにして当事者は「生きづらさ」を乗り越え、社会運動として、自らの活動を考え、展開させていけるのかという重要な問題がある。本論文は、事例部分では個別の対処戦略をアイデンティティ論の観点から描出したものであるが、問題設定と結論では社会に働きかけるための運動論的とも言える常識知の揺るがしについて議論されている。アイデンティティ論がどのように社会的な常識知の揺るがしにまでつながるのかについて、より丁寧な議論が必要である。被差別の立場にある人々が支配的な社会や文化の価値や規範の変革をめざし、当事者の運動として、これまでさまざまな解放運動を組織し展開してきている。髪のない女性たちの当事者活動に、どのような解放運動としての契機や可能性、あるいは限界があるのかなどをさらに検討する必要がある。

しかし、こうした課題は、髪のない女性たちの「生きづらさ」を曖昧な問題経験として捉

えなおし、その詳細を明らかにしたうえで、実際「生きづらさ」を乗り越え生きている当事者の経験語りから「生きられた社会学」としての対抗戦略を分析した本論文があつてこそ、初めてみえてくるものである。その意味で、まさに「さらなる充実した研究を展開するための」課題と言える。

本論文は、社会学において、これまでにない主題を設定し、これまでにない知見をまとめており、優れた学術的成果として評価できるものである。

よって本論文は、博士（社会学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令 和 年 月 日